2003年 1月 10日

人間科学研究科委員長　殿

芳野　郁朗氏　博士学位申請論文審査報告書

芳野　郁朗氏の学位申請論文を下記の審査委員会は、人間科学研究科の委嘱をうけ審査をしてきましたが、2002年12月16日に審査を終了しましたので、ここにその結果をご報告します。

記

1.　申請者氏名　　芳野　郁朗

2.　論文題名　　興味概念の再構成に関する研究

3.　本論文の主旨

本論文は、動機づけ研究の一環として、興味の概念について検討したものである。伝統的な内発的動機づけの諸概念にたいして興味の概念の優位性を実験的に示し、その興味の概念の因子構造を明らかにし、また興味の形成が環境によって影響を受けることを示したものである。

4.　本論文の概要

第１章では現在の動機づけ研究の中で興味を採り挙げる意義をまとめている。まず興味に関連した研究を概観し、これらの研究における問題点を指摘した。また現在の興味に関連した研究の中心となっている内発的動機づけ研究を紹介し、当初の研究からの変遷を紹介した。この中で現在の認知的評価理論に基づいた内発的動機づけ研究の問題点を検討し、これに対して興味を中心としたアプローチを行うことの意義を述べた。さらに従来の内発的動機づけ研究に見られる興味に対する考え方をまとめ、興味の定義やその働きを「広義の興味」と「狭義の興味」に分けて検討した。但し、ここでの興味の概念は、ある限られた概念内容のものであると限定した（以下「興味」とする）。その上で、本研究ではこの「興味」と行動の関係を検討するとともに、「興味」の形成過程やその構造についての検討を行うことを目的としている。

第２章では第１章を受けて刺激入力から「興味」の喚起、行動に至る過程を検討し、本研

究の大まかな流れを紹介した。
第３章では「狭義の興味」として課題に対する「興味」を取り上げ、従来の研究で取り上げられて来た要因と共に行動に対する影響を検討した。研究１では課題に対する「興味」は動機づけに対して強い影響を持つことが示唆された。研究２では従来の動機づけ研究で採り上げられて来た自己決定や原因帰属などの要因が、課題に対する「興味」を媒介として、間接的に課題に対する動機づけに影響を与えていることが示された。研究３では特に解答不可能な課題を遂行させた場合に課題に対する「興味」や個人内である程度一貫した性格特性として仮定される「一般興味」が失敗経験後の動機づけに対して直接、間接的に強い影響を与えていることが示された。これらのことから「興味」は動機づけと非常に密接な関係を持った概念であり、「興味」を中心として動機づけや従来動機づけに対して影響を与えると考えられてきた様々な要因を再構成することの重要性が示された。また人間の行動に対して影響を与える一連の構造として、「広義の興味」を仮定できることが示された。
第４章は第３章で「興味」の重要性が示されたことを受けて、「興味」がどのようにして形成されるかについて検討したものである。研究４では「興味」が後天的な環境の影響を受けて構成されることが確認された。さらに自己決定性を重要視している認知的評価理論に基づいた内発的動機づけ研究とは異なって、親が子供の行動に対して一定の制限を加えるような働きかけを行うことが「興味」を促進すると考えることができた。この結果、「興味」は従来の内発的動機づけ研究において提唱されてきたほど生得的な要因によって構成されているのではなく、各々の時期において各個人にとって中心的な役割を果たす環境の影響を強く受けて変化するものであることが示唆された。
第５章は「興味」の構造を検討するとともに、こうした構造が環境の影響を受けて構成されることを示したものである。研究５では大学生の「興味」が日常生活を通して形成され、逆にこうして形成された「興味」によって日常生活の中で経験される様々な活動に取り組むという過程が示唆された。研究６では、職業が成人期の周辺環境のうちでもっとも顕在的に個人に対して様々な要請を与えるものの一つであることを示唆している。さらに人間の「興味」がこのような周辺環境からの要請に対して適応的に構成される傾向を持つことが示唆された。また大学生の「興味」が自己決定や有能感、関係性といった単純な要因によって構成されているのではなく、これらの要因が複雑に絡み合った個々の具体的活動そのものに対して向けられていることが示された。成人期において個人に対してもっとも顕在的な要請を与える環境の一つである職業によって「興味」の構造やその変化に相違があることが確認された。
第６章の総合考察では第1章でおこなった「興味」の定義に照らして本研究の意義を述べた。第3章の研究からは「興味」が動機づけに対して直接的に影響をもち、従来の研究で採り上げられてきた様々な要因は「興味」に対して影響を与えることによって間接的に動機づけに対する影響をもつものであると考えられた。このため、「興味」を中心として刺

激入力から行動に至る一連の過程を想定し、全人格的反応系列である「広義の興味」を仮定できると考えられた。第4章、ならびに第5章の研究から、「興味」が個体発達の初期の段階では親の養育態度の影響を強く受けて形成され、それ以降多様な環境からの要請に対して可能な限り適応するように変化するものであることが示された。また第5章の研究によって、「興味」を喚起する対象は従来の研究で採り上げられてきたような単純化された要因ではなく、これらの要因が複雑に絡み合った特定の構造を持った対象であることが示された。こうしたことから本研究で採り上げた「興味」が「周辺環境から情報を収集し、自らの認知構造内に再体制化することを目的とした動機づけである」という定義に基づいて検討するべきであると結論された。しかし本研究では「興味」について、入力された情報の主観的な有意味性や「興味」に影響を与えると考えられる様々な要因についての検討が充分には行われておらず、これらの点についての研究が今後の課題となる。

5. 本論文の評価

本論文では、「興味」の概念を実験や調査によって規定されたものとの限定の上で、「興味」の研究を伝統的な内発的動機づけや原因帰属の研究から出発している。研究１では課題の選択と課題の難易度の選択という自己決定が課題遂行に及ぼす効果をみたところ、前者が効果的であることから、やりたい課題の選択すなわち「興味」というべき概念の必要性を指摘した。研究２では特に学習性無力感に関する実験を行い、失敗経験を克服して、課題遂行に対する効果は、課題への「興味」が直接関係をし、原因帰属などは課題への「興味」をとうして間接的な関係であることがわかった。研究３では課題に対する「興味」、およびものごとに対する「興味」とその持続性の高さを「一般的興味」とし、特に課題不解決事態における課題再遂行にたいする効果をみたところ、原因帰属などの要因よりも「課題興味」と「一般的興味」が課題再遂行にたいして直接関係していることが再び確かめられた。これらの結果は内発的動機づけ理論で言われている動機の概念とは別に、「興味」の概念の必要性を実証したものであるといえる。

ところで動機づけ理論では比較的生物的考え方が支配的であるが、「興味」にとっては環境の影響を考えることが必要である。そこで研究４では高校生を対象に、環境要因として最も影響の大きいと考えられる、過去の親の養育態度と現在の「興味」との関係を分析した結果、養育態度の因子として抽出された自主性の因子よりは、どちらかというと親の積極的な子に関わる因子が、現在の「興味」因子である好奇心の強さや単調さの回避との関係が見られた。このことは過去の養育という環境要因の影響の強さを示すものと言える。

研究１、２、３の結果から動機づけには「興味」の概念が必要であり、また研究４の結果から、環境の影響が考えられることから、そのような「興味」は大学生においてどのような構造をしているのかについて、研究５で分析された。その結果それは７因子から成り立っていることがわかり、妥当性も示された。このように「興味」は内発的動機づけ理論でいわれている３因子よりかなり多様な構造をしていることがわかった。

このような「興味」は更に職業についている成人において、どのような構造になり、それが職業と言う環境によって、どのように変化しているかについて、研究6で分析された。成人において青年期を回想した時、「興味」の因子はほぼ研究5で得られた因子と同じであったが、成人である現在ではやや異なった5因子構造であった。これは職業についたという経験によるものと考えられ、また青年期と現在との因子間の関係を解析したところ、職種によってかなり異なっていることがわかった。このことは職業という成人にとっては重要な環境が「興味」の変化に影響することを示したものである。

本論文で試みたことは、伝統的な動機づけの研究において、あまり問題にされてこなかった「興味」と言う概念を動機づけの中に位置づける作業であったと言える。伝統的な動機づけ理論が実験室的研究に限られているという批判から、「興味」という概念を伝統的な動機づけに関する諸概念と比較しつつ、「興味」はそれらを内包するより包括的な動機づけの概念として位置づけることができることを示したものといえる。そして有意味性（価値）を含んだ「興味」の因子構造や環境による形成と変容について明らかにした。興味というテーマは大きく、限りのないものであるが、本論文は動機づけ研究として興味の概念の重要さを認識させるものとして意義のあるものであるといえる。よって博士（人間科学）の学位を授与するのに値するものと認める。

6. 芳野　郁朗氏　博士学位申請論文審査委員会

主任審査委員	早稲田大学教授	文学博士（早稲田大学）		春木　豊　印
審査委員	早稲田大学教授	博士（人間科学）	（大阪大学）	野嶋　栄一郎　印
審査委員	早稲田大学教授	博士（人間科学）	（早稲田大学）	斎藤美穂